

北海道科学大学 (2019年リーグ戦2部3位)

9月1日、札幌市手稲区の北海道科学大のグラウンド。晩夏の日差しに、秋の気配も感じさせる涼風が吹く中で、北海道科学大アメリカンフットボール部の選手が集まった。練習開始前に試合用のユニホームで整列し、秋季リーグ戦のプログラム用の写真撮影をしたが、全員で10人しかいない。伊藤公昭主将(4年)が「2年生以上が12人。きょうは2人が面談などで欠席です。コロナ騒動で1年生の勧誘ができず、今年はこれで乗り切るしか無い」と説明した。

北海道工業大時代の1988年に創部し、93年に1部に初昇格。96年から2009年までは14季連続で1部で戦い、98年には準優勝した輝かしい歴史を持つが、11、12年シーズンを最後に2部に降格したまま。科学大に校名を変更して4年目の17年に2部優勝を果たしたが、1部との入れ替え戦で北海学園大に大敗し、復帰を逃した。チーム力低迷の最大の原因は部員不足。1年生から試合に出場する伊藤主将は「試合ではOLとDLのリャンメン(両面)。スタミナが厳しいが、やるしかない」と言う。

今年は新型コロナウイルスの逆風も加わった。2月の道の緊急事態宣言と4月の国の非常事態宣言で大学が課外活動を禁止したため、練習を再開できたのは7月下旬。中断期間中は週4回、部員全員がスマホでつないで同じメニューの筋トレに励み、再スタート後は、市内の整骨院に勤務するトレーナーが用意してくれたメニューで体力を強化。8月25日からはヘルメットと防具を着用し、コンタクトプレーの練習も始まった。急ピッチでチーム力回復を目指す練習だが、少人数の制約は多い。パスプロテクションの練習もオフenseとデイフェンスが2人ずつ。ワンプレーごとに伊藤主将がオフenseの後輩選手に体の使い方や足の運び方などを指導した。

札幌白石高の野球部出身の伊藤主将。「コンタクトスポーツに興味があった」と入部し「フィジカルと戦略のおもしろさがアメフトの魅力」と言う。リャンメンの辛さも「くたくたになるが、勝ったときの喜びは大きい。人間的に成長できた」と前向きだ。

もう一人の4年生、RB塚本嵩都は北広島西高のバスケットボール部出身。1部リーグで今年3年連続リーディングラッシャーを狙う札幌学院大のRBアンダーソン・真・グレンは高校のチームメイトだった。「アンダーソンにアメフトを勧められた。僕も1年生から3年連続で2部のリーディングラッシャーなんです」と胸を張った。忘れられないのが1年生のときの北海学園大との入れ替え戦。「学園のDLをぶっちぎり、LBもローリングでかわしてファーストダウンを取った。1部校相手に会心のランだった」と振り返った。

北海道医療大、札幌大、東京農業大と棄権の申し出が相次ぎ、釧路公立大と北海道科学大の一騎打ちになる公算が高い今年の2部。伊藤主将は「順位は関係ないので、自分たちのできるプレーを目一杯やりたい。楽しくアメフトをやりたい」と決意する。塚本も「今年が一番調子が良いので、タックラー3人につかまっても走れるように、試合までにもっとパワーアップしたい」と意気込んだ。



【試合用のユニホームで勢ぞろいした北海道科学大の選手たち】